

## 阪神大震災におけるボランティア活動と社会奉仕実習\*

### Volunteer Activity of Hanshin Disaster and Volunteer Activity in a Course Work\*

北川博巳<sup>\*\*</sup>, 江藤剛治<sup>\*\*\*</sup>, 篠原 紀<sup>\*\*\*</sup>, 武田慎治<sup>\*\*\*\*</sup>  
竹原幸生<sup>\*\*</sup>, 花嶋温子<sup>\*\*\*\*\*</sup>, 三星昭宏<sup>\*\*\*</sup>

By H.KITAGAWA<sup>\*\*</sup>, T.ETOH<sup>\*\*\*</sup>, O.SHINOHARA<sup>\*\*\*</sup>, S.TAKEDA<sup>\*\*\*</sup>  
K.TAKEHARA<sup>\*\*</sup>, A.HANASIMA<sup>\*\*\*\*\*</sup>, A.MIHOSHI<sup>\*\*\*</sup>

#### 1.はじめに

これまでの土木開発事業は機能性を重視したものが多かった。しかし、今日では多自然型の河川や住民一体型の地域開発,あるいは福祉のまちづくりなどに見られるように,暮らし向きを良くする上で,開発地域周辺の種々の環境や地域住民の意向,また社会的弱者を考慮している。今後,このような意識を持った土木技術者を養成する上でも,それぞれの素養を持たせるような土木教育を考えてゆかねばならない。土木工学とは人間性を教育することも1つの重要な課題であるといえる。学生に市民工学としての土木工学を理解してもらい,土木技術者として必要な素養を持ってもらう1つの機会として,近畿大学理工学部土木工学科では,新設したカリキュラムに社会奉仕を取り入れた。

このような実習科目を取り入れてゆくにあたっては,効果的で効率的な土木工学教育を考えてゆく必要がある。その中で,従来電子計算機を利用した教育について,その効果とかかる労力について考察した研究がある<sup>1)</sup>。そこでは,電子計算機教育は・視聴覚教育は当時の教育手法と比較すると効果的ではあるが,かかる労力も大きいという結果となった。とくに,これらの科目に関しては導入にともなって初期的な労力がかかるという結果となっている。社会奉仕実習に関しても,その教育効果・労力を見てゆく上で,今まで実習内容の概要を述べたり<sup>2)</sup>,学

生の土木技術者としての職業意識に関する調査を実施してきている<sup>3)</sup>。その調査では,土木工学科の学生は他学科の学生と比較すると,使命感や協調性・リーダーシップを重要と考えている。また学年があがるにつれて,協調性,社会的常識や礼儀,新しい技術を学ぶ努力については学年の間で意識がまとまるという結果となっている。

このような準備を行って,「社会奉仕実習」を今年度4月より開講する予定だったが,1月16日に阪神大震災というこれまでかつて経験したことのない大震災に阪神地方は見舞われて,ボランティアに対する要請が高まっていった。また,土木に関連した分野においても大量のマンパワーを必要としていることも考慮して,「社会奉仕実習」を前倒しで実施することになり,学生の派遣を行った。ここでは,社会奉仕実習の概要と今回派遣した活動の内容について報告し,土木工学教育とボランティアについて,今回の震災とボランティアとの関係について考えてゆくものである。

#### 2.社会奉仕実習の概要

##### (1) 社会奉仕実習導入の背景

近畿大学理工学部土木工学科では,平成6年度より建設・設計コース,計画・環境コースの2コースを設け,一般教養をはじめとする従来までのカリキュラムの改訂を実施した。当学科におけるコース制と新カリキュラムの変更点,および特徴を表-1に示す。これまでの学年制を廃止し,単位制を導入したのをはじめ,旧カリキュラムで不足していた計画・環境系の科目の充実をはかっている。また,これまでは全くなかった土木史,環境デザイン,公共経済学等の科目を新設すること,ゼミ,実験・実習科目を増設することで,物事の現象および,教員・社

\*キーワード:意識調査分析,防災計画

\*\*正員,工修,近畿大学理工学部土木工学科

(〒577 東大阪市小若江 3-4-1, Tel(06)721-2332, Fax(06)730-1320)

\*\*\*正員,工博,近畿大学理工学部土木工学科

(〒577 東大阪市小若江 3-4-1, Tel(06)721-2332, Fax(06)730-1320)

\*\*\*\*正員,近畿大学理工学部土木工学科

(〒577 東大阪市小若江 3-4-1, Tel(06)721-2332, Fax(06)730-1320)

\*\*\*\*\*正員,工修,圏地域環境システム研究所

表-1 カリキュラム改正の特徴

コ   ス 制	計画・環境系分野の教育の充実
	受験生に土木工学の教育内容を理解させる
	将来の進路の目標の明確化
	進路にそった重点的な教育
カ ラ リ ム キ 改 ユ 善	ほとんどの科目は共通（必修・選択は違いがある）
	時代の要請にあった科目を新設
	学年を通じて電子計算機科目を学べる
	単位制の導入
	実習・ゼミ・実験科目の充実

会と直接的に触れることを目的としている。

このようなカリキュラム改訂の中で、限られた時間と労力を使って、学生のリーダーシップや協調性、創造性を養成するだけでなく、環境や弱者に配慮した技術者を育成するため、またデザインのセンスやゆとりの精神などの感性に訴える部分の素養を身につけさせるためには、これまでの土木工学教育とは一風関連性の薄い科目を導入することも必要と考えられた。そのため、計画・環境コースでは1つの試みとして、学生の社会奉仕に対して単位を認定する「社会奉仕実習」の導入に踏みきった。また、以前のカリキュラムで建設に関する業務に従事した者に単位を認定する実習があり、建設・設計コースにおいては「社会奉仕実習」に呼応して、それを「建設実務実習」として復活させた。

「社会奉仕実習」と同様に、他大学でもボランティアを実習科目として導入している学校があるということで、調査したところ、平成4年以降で学生のボランティア活動に対して、単位を認定する学校が増加している。このような実習を導入している大学は主として文系の学部・学科が多く、教育目標として、これまでの教育でカバーできないような人間性の教育を取り上げているところは共通している。なお、今のところ理科系では近畿大学以外では見受けられない。

## (2) 社会奉仕実習の内容

社会奉仕実習の単位認定・指導体制は計画・環境系の教員が1年程度をかけて議論した。その結果、選択科目ではあるものの、計画・環境コースの学生

にはすべて受講を勧める指導を行うこととした。学外での実習なので、マナー等に対するきめ細かい指導が必要となる。よって、7名の教員が指導できる学生数として、30名と設定し、半期あたり30名の定員を設けた。ボランティア活動は、夜間・休日・夏期休暇等の長期休暇を利用して実習をする。なお、活動時間として、夜間・休日を利用する場合は、合計20時間以上、夏期休暇等を利用するような1日あたりの活動時間が長時間で、日数の少ない場合は、40時間以上を単位認定の活動時間の目安とする。と決定した。表-2に実習の概要を示す。

つぎに、これらの決定事項を踏まえて、学生の活動をサポートする意味で、社会奉仕実習の手帳を作成した。作成にあたっては、同様にボランティア実

表-2 社会奉仕実習の概要

対象：土木工学科計画・環境コースの学生 (なるべく全員が参加するように指導)
内容：オリエンテーションとして講義を4回実施 ボランティア活動（休日・夜間利用→20時間以上、夏期・冬期休暇利用→40時間以上） 社会奉仕実習発表会
指導：教授4名、助手3名 教員1人あたり4～5名の担任制
単位：選択科目2単位 成績は合否で評価する

表-3 社会奉仕実習手帳の概要

1.社会奉仕実習の概要 (1)目的 (2)科目の設定 (3)単位認定までの課程
2.ボランティア活動とは
3.社会奉仕実習活動計画書 (1)活動計画のたてかた (2)記入の仕方 (3)社会奉仕実習活動計画書用紙
4.活動中の諸注意 (1)活動中のマナー (2)ボランティア保険 (3)事故発生時の対処の方法
5.社会奉仕実習報告書 (1)記入の仕方 (2)社会奉仕実習報告書用紙
6.社会奉仕実習発表会 (1)発表の仕方 (2)発表概要の書き方見本
7.詞 「ボランティア拒否宣言」

習を実施している他大学に問い合わせ、学生に配布している手引き、手帳等を入手した。さらに、各種ボランティア団体の発行しているパンフレット・雑誌類も収集して作成のための参考とした。これらの資料を参考にしながら社会奉仕実習手帳を作成した。手帳の中で記述されている項目を表-3 に示す。作成上で注意を要した点として、ボランティア活動の意味、ボランティアの実態をどのように表現するか、および、活動上のマナー、事故時の対処法について掲載した。

#### 4. 阪神大震災学生ボランティア派遣

「社会奉仕実習」として、上述の準備のもとで4月から開講する予定で進めていたところ、1月17日に兵庫県南部地震が発生し、神戸を中心とする阪神間に多大な被害があった。その後種々のボランティアが被災各地で活躍し、日本におけるボランティア元年と言われるきっかけとなった。さらにボランティアの需要が増加して、文部省からも学生ボランティアにも単位を認定させるなどの配慮に関する要請があった。

このような震災による緊急性とボランティアの需要増加とを鑑み、近畿大学理工学部土木工学科でも、「社会奉仕実習」と「建設実務実習」を前倒しで実施して、阪神大震災にボランティアを派遣することを決定した。派遣先として、避難所の炊き出し、手伝いといったボランティアのみならず、当時かなりのマンパワーを要する分野であることと、土木工学科の学生として、今回の大震災を理解させる意味で、兵庫県・神戸市・西宮市・豊中市といった自治体をはじめ、コンサルタント・学会・民間企業等に打診し、全部で15程度の活動先が決定した。ただし、中には専門的な内容が多く、作業等は難しいといわれたケースもあった。そして、学年末試験最終日の2月23日に「社会奉仕実習」、「建設実務実習」を次年度に履修する1年生だけでなく、2,3年生にも呼びかけてボランティアを募ったところ、300人以上の学生が参加を希望した。

実際、土木に関するボランティア活動はかなりの専門性があることも考えられるので、事前に数度の

表-4 ボランティア活動の内容

- |                |            |
|----------------|------------|
| ・文書作成          | ・道路、構造物の調査 |
| ・図面作成          | ・物資搬入      |
| ・罹災証明の発行、説明    |            |
| ・引っ越しの手伝い      | ・清掃        |
| ・基準点調査         | ・修理修繕      |
| ・計画、立案         |            |
| ・一般的な震災のボランティア |            |
| ・ボランティア派遣の事務   |            |
| ・その他           |            |

打ち合わせをし、活動内容は表-4 のようになった。

活動に際しては、単独で行動・活動するよりもグループ単位での活動が望ましいと考えた。また、各グループにリーダーを選び、連絡事項等はリーダーを中心として活動してもらった。

学生への支給品として、被災地での作業ということで、マスク・軍手だけでなく、記録をとる意味で野帳・レンズ付きフィルム、社会奉仕実習手帳を配布した。また、活動前には表-3の社会奉仕活動計画書の提出を依頼した。

活動時間としては、当初決定していた夏休休暇等を使用する場合に該当するというので、一日で8時間程度、日数として5日の活動を最低限の数字とした。実際、平均的な活動時間と日数は、一日5〜8時間で5〜10日の活動となった。今回は大規模なボランティア派遣である。よって300人以上の人間を動かすことを考慮して、その事務負担を考慮して、期間中にボランティア事務局を設置し、そこで連絡や活動の調整を依頼した。

#### 5. 学生派遣後のアンケートについて

3月中と4月の前半にわたって表-4に示された活動内容でボランティア派遣を実施した。そして、今回の学生派遣に関して各派遣先での活動報告をするためにも3月20日に中間発表会を行った。ボランティア活動を継続中の学生がいるため、出席者が150名程度であった。内容として、日程・場所・活動人数・内容・感想・今回の活動先で今後もボランティアが必要かどうかの有無について、1人4〜5分程度で発表を依頼した。発表の中ではいくつかの小さな

トラブルや失敗もあったようだが、大きな事故はなかった。

この中間発表会の場で今回の震災に対するボランティアの派遣で学生の職業意識・土木工学に関する認識の変化を見るため、および今後のボランティア実習に向けての意見をもらうためにもアンケート調査を実施した。質問項目として、表-5に示す内容を質問している。

表-5 ボランティア活動後のアンケート調査項目

- ・ボランティアの種類
- ・ボランティア活動の内容
- ・ボランティア経験の有無
- ・ボランティア活動の感想
- ・ボランティア活動が自分に及ぼした変化
- ・対人関係
- ・ボランティア活動での満足度
- ・活動中のマナー
- ・就職希望先
- ・職業意識に関するアンケート
- ・社会奉仕実習の感想

を質問した。今回、集計結果は無いが、発表会ではこの結果をあわせて報告する。

## 6. 結び

近畿大学理工学部土木工学科では、社会奉仕をした学生に対して単位を認定する「社会奉仕実習」を今年度の4月から開講する予定であった。今回は阪神大震災でボランティアの需要が高まり、前倒しで実施する運びになった。活動先は震災に関するボランティアのみならず、土木工学に関係する役所、企業・学会に学生を派遣することができた。環境や弱者に配慮した土木技術者の養成という意味でも、また、震災という特殊性を考える上で、大学生はボランティアの供給源となりうる可能性を考えてゆく意味でもボランティア組織としてのあり方を今後考えてゆく必要がある。

今回の派遣に関してのいくつかの問題をあげると以下ようになる。

・今回の震災は予想しなかったことであり、ボランティア派遣に関しても決定がかなり遅れた。

・今回は300人以上の参加があったため、事務局を設置したが、情報が交錯し不効率がかった。

・近畿大学ではどちらかというと兵庫県以东の居住者が多いため、交通に関する費用が相当かかった。今回はこれらを支給するには額が乏しい。

・今回は大きな事故は無かったが、事故に関する対処法により万全を期す必要がある。また、学生の派遣日にも連絡の不足があり、食い違い等のトラブルがあった。

これらの問題点があっても、今回の災害ボランティア派遣が土木工学および震災を理解する上でも、学生にとって意味深いことになったものと考えられる。今後も通常の形での社会奉仕実習が学生に及ぼす教育効果についてとらえてゆくつもりである。また、室崎他が、防災ボランティアの機能やその特性をいくつかの事例から整理して<sup>9)</sup>、その組織化についての可能性を探っているように<sup>9)</sup>、土木関係のセクションにおける作業補助等でも、学生ボランティアの有効的な活用方法といった、緊急時にボランティアを組織化する上で必要な事項について探つてゆくことが必要であろう。

<参考文献>

- 1)江藤、水野、谷平、三星、佐野他：多人数土木工学教育における電子計算機の利用、日本工業教育協会誌、第31巻第3号、pp.11-15,1983.
- 2)花嶋温子、江藤剛治、三星昭宏：大学土木工学カリキュラムのボランティア活動の導入、土木学会第49回年次学術講演会講演概要集IV、pp.62-63,1994.
- 3)花嶋、江藤、三星、篠原他：社会奉仕による土木工学科学生の意識変化、土木計画学研究・講演集、No.17、pp.105-108,1994.
- 4)竹原、北川、武田、花嶋：土木技術者としての生き方意識に関する調査、平成7年度土木学会関西支部年次学術講演会講演概要、IV-48,1995.
- 5)室崎、大西、井谷、多田：防災ボランティアに関する研究(その1)概念と具体的活動事例、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、pp.287-288,1988.
- 6)室崎、大西、井谷、多田：防災ボランティアに関する研究(その2)アンケート調査からみた組織化の条件、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、pp.289-290,1988.